中村俊定文庫
文庫 18
192





其序

早稲田大学図書館

早稲田大学校定文庫

神無月の十日の頃おひかぜもすこし
乃葉もちりてまばらに成ゆくころ
すすきの穂の浪寄る風情も春の花
色及ばずまたもみぢの錦なんと下手の大口たゝかれて
かの判官乃おつぼねさまも仰せられ
かくて秋も如何ともつきぬるにあらし

ウ

奥almaとなぬ相撲よ勝て居て　但馬　李仲

羽織着てうき公家の百姓　長崎　路圭

草ふきか茂のあるの恥ぢ　大津　雲琵

詠むりさをひよ合歓の花ちる　今　円入

書てやる牛も名残の見吹て　今　宇陀

菖屋の軒の平打て土清　勝所　昌房

銭店を二男ら風もる門の眼　今　洒堂

廣ひ世界よ出たをとりて　近江　佐角

ニヲ

手入せぬ不弘萩のまがるまで　今　冠那

娘はうりハすれ十六夜乃月　江戸　千梅

肌寒き伴達の高笑の一章等　四日市　玉之

陽治ハ遠き逸也ぬて養生　桑名　此芳

残かゑる山ハ訓堂の葬よる　今　午潮

日ハ也てよたれてゐを少　今　里川

ニヲ

もかりの桃まさ　今　左付

溝よハ膏の　今　箕三

おれぬ曳潮

赤飯よ拳の腹をふくれかえ　名古屋　昇角

豆の木よ伝ふよ星を別　今　師冬

かなたへその谷しも今ハ畑　今　丁牧

なれもおりく朔日の礼　今　竹夜

未履てそうそたつき雨あり　今　巴席

箪とハいてもわはら田も車　今　左把

新田ふまハないかとおもふた　濃州岐阜　麥士

鷹狩の風をあふる相撲　童平

稽古して横ちんえもいそうな　狮子門　白狂

金仏の矢ひをもつ店先　長良　有琴

盆の月着経くさきタあり　越前府中　岚枝

二ウ

桐も桝もまふ二ぴき三匹　今　桝敷

かく寫ふおもりのかゝは秋の雨　空　帰的

嫁しうもいへておりい　福馬　聾吹

庚申ハ何もきうの猿りんさるて　三囲　昨衰

又見ふ先ゟ座ふ特進　今　播東

なごりとハ未れの庵を入ま
おうね別れの辛よ庵ゟ
東ゟ走ゟ走仕業の爲とも 加州大正寺 馬泉 ゟ 慰角 ゟ 佐北
帆よちつゝと見ゆる八景 小春 朴人 ゟ
養父ゟ来てハ二階ゟ書を延 松任女 千代 ゟ 左靜
遣ひをとゞめ 金沢 山隣 ゟ
ひさとはく歸まて月をかこつ名 ゟ 曾及
未償よ奇ゟむ須広の遠笛

商よ花待事ゟむまひと
初午の日も雪ハちゝし ゟ 岐葛
はゝそゝし姫のもゝ立を尺ゝひや ゟ 丈志
いゝ名てきはゝ城下よ賣きれて ゟ 知角
もち米の廣い橋よゐく年 金澤 素然 ゟ
雪もこるゝ橋よゐく年 ゟ 沂青
隙てゐ時もゝ鳩ゟを社人達 ゟ 生可
かけてゐ名しを折ぬ双亡 ゟ 侶鵠
風曲

収ものを見うけてちよせいと商ひ　今　舎衆

新年をみの使よき頃　今　亀町

石燈乃被を金ぬよあまり　今　希周

銅乃如き本の面そよし　今　尓来

そのもを雨もも遠き月の色　今女　紫仙

さびても鮎ハ疋両匂ひ　今　野角

あいさつも叔父のんよ角八郎　濃北方　里紅

うつむく顔の赤き顔の赤き　越中石動　簾従

奈会社揃よまつよ山お祭　今　更酋

細きはみりの着物さびき　今　方豊

野よもちき窓うぐいそくる　今　可有

木情よき言をよそ十年　今　眉泉

仕事を着て姉よたつまひ　富山　二川

振舞の日ハ待ぬまひ　今　一酉

水うち庭の昼すゝ　今　汐鳥
竹の葉のまつくら　今　一庸
毛ちれさをあつよなる　今　倚蘭
をはちよんつきて　今　白推
今俤もまが〻と　今　鴈季
長閑さ鳥の声もくさまで　今　秋巷
雪汁を待てや　今　閤乃　（隼津）
山のたゝずまひ一方の昼　　栟雨

かうさ玉敷地をよ出ぬ晴て　今　犬凡
苔ふかひなる一まつ峡　今　倚庵
疱やみ小ふより障子明ひ　今　季布
蒔絵を入せてかく子箱　泊　巴周
あて言ふ妻をおもふ大工とて　今　松宇
火の香ふ噪あ霜の朝を　今　杵丁
虹のきえつ沖も静ふ露をしき　今　鴈兮
簇お毛ーろき法性寺笠　越後糸魚川　蒐陽

迎をと尚てさいあるに
貧乏よ祈りて病ひ重りぬ
秋の名を八百屋よかされる月
古ひ内裏よ高のおぼろ
膳をハみ箱よ添て筆先記
若くハ四のもてなし
引窓よ細いあかりをうけるる
不破の関屋の関も小ひさ

々　九蛙
今志ゐは過角
新ほ　慈竹
々　可及
々　始流
々　葉園
々　山市
々　有隣

廿日和笠よかく雲雀哉
舟ばきに三てや々小便
その國を去る時花かおの所
秋よのかけりよる里
こゝろ寺

々　雲枝
かな　鴎笑
新ほ　鷺州
々　此抹

芳魁之朝

むら竹をたのむの懐山和尚ハ馬ふねよいも
かつらハ焼ふるよ　徐侯の酒盃ハ西
白なれど殺風景の髪名ハ遠れかな
中比ハましの吉野院ハ雪ふれハ
徐よなりそ今やふ露相庵うかれハ
湛亭の七里よ詔せられて　世よいふまあろ
きの風味をきゝて高野の名そもく

芳頭吟　　遠二

きりさめをふくめる集の撰者ハ尚ふる
ゆくをとゞめるふ芳のさひよあそや
遠二うかく一名をのりて黄山
のゆをよ月よまれるを七月のあり
吉日の比ふるふ
　　物をの名のまゝ
　　月まてまゝ
　　ゆかしら

乳芋頭　井童平

老のあさまだてきれいな
新妻を抱く様なる新芋哉
よ芋よほんとうんのやうも
名さへ三五の月よもてはやし

詠田時雨　露拄庵

こなき水を春のおそうり
蓑をきる雲の峯ぞあやし

月とそいはも乃もの雪よ圖好
雪よ圖好裏乃鍋をさゝひき

懐　露拄庵之山居　陳吾仲

露とはらの卅乃戸をおとなひ
世よ花鳥ぬ語もはれう
雨乃庵山も月乃廬山も
酒すゝして芋からもや

春

梅ヶ香のつゝと日乃もる山路哉　芭蕉翁

田乃畔や掛乃足ある月のあと　野坡

菜をそゝる二造作や世をうぐひす　昌房

風呂數よ雲雀まん鳴ひとり　惟然

梨の花咲や鳴るをとゝ頻　百阿

寒い世をぬる夢ぞよ掛乃足　鷺洲

春の日み針を仕舞て余寒哉　一宁

暁撞の袴よりけぶくばしる朝
公かりや猫抱あけてなをゆふ　此荘
よよともあり賞のえつ音ぬ日　富山僧　慈竹
賞やかくんてもる竹の雪　三国　一空
うくひすや着そひろく乳と乳　播東
賞や春の朝日二名寺々　加茂　一丁
うくひすや都を落て春の雪　五泉　二扇
賞や表ゝ目のちゝまて二帰　ヲスリ　一雨
　　　　　　　　　　　　　　　　　拓卜

賞よはゝそ乃おく行ぬ柳ゝれ　加州　梨兄
むめゝ香をとめて紙子の仕舞ゝ　　飛由
元市乃住迄を掃やむ気の起　長サキ　路幸
白粉を刷くおゝ名や窓の梅　金沢　山隣
うそくゝき木の屋敷や梅のも　　木北
梅ゝ香乃軒よりとむや朝曇　加賀女　宜僊
上下ハ梅よかるゝーむめゝ花　泊　里童
梅ゝ香ゝ名をそつゝ篇々　杨尾　隨宜

やまの松乃梟を祖ちゝり揚のも
揚ゝ香やいつゝの鐘も下戸の時
むさゝちるやその木蔭する雪の上
紅梅よ都をさけて入日さす
手まりたわれてこゝろ安さや五月の雨
やり羽やり羽二つ捨て蛇ゝ睦
寶ひや寶乃長者の寶屋敷
拾芝の寶をほしくゝ

冨山　鳶昏
五泉　芦山
トヤマ　有鳥
巻　一睡
奥津　曾六
ソボク
巻　暮雨
金沢　籔守

春日野を雪の世すぎ身ぞ
久月の如月ねうねうする春日うま
春のひを牛よ春ふる ゝゝま
菊をまく去年の顔ぞ梅の花
おまきれ立の袋や うれ猫
山の戸ひぬくやゝ巌乃初雪より
早ひや苔出る谷の雪
角猫活やうゝ寒き百舌鳥

竹風
富州
山市
葉園
鷗矣
岩船
漆蛙
巻
里桃
羽州久平
箕夕

蓑着る羽うひよ雪のけふ菜そな

牛も疲てをぬをたや蕨はこ　七尾　夏哺

ちるね星をかけよ花のまれる　桑名　佐什

春の月乃仏在れ木の芽哉　江州　北而

山一つ〳〵一るの乱かく眷日乃鶏　紫電

雉子の声ぬするや茶の霞　尾州　師冬

青麦の末しやきしめ聲　加木　芦雛

〳〵山の朧まむし一雉の多　本吉　半瞻

朝起の紙比や雑子の聲　上和田　野水

山売のあをむかて一や雑子の壱　一万　水

観想

くれそする草を蒲そな馬の脊　雲鈴

かけろやね立夫の庭はく　長すキ　何朴

人の気をけりあけて婦ひそれ　京　山只

芽なとるまとも日和やるひそり　雲枝

草子の笛も吹てやひそりのよ　加茂　素後

行春の雲見えて降る雲見えず　尾州　三逕

かくれ家のあるじやみひとり　長すすき　和

雲雀なく空のほとりや麦の霜　臼井　吟之

野の時雨牛も頬ずりひとりゐ　可及

月の夜の火も及ばぬ庵哉　臼井　志芦

春を守るくぐつ蟇のねむりけり　金沢　北枝

生花やぬれ羽の蝶乃雨やどり　石動　子川

菜の花やうれしさはむ蜂の針　冨山　二川

菜の花や乳房よ蝶や泣ねうり　武門　梅蝶

なの花や風よりすべる蛇の壱　福居　一宇

蝶くやこそうりあるく一寸ト　泊　芦情

春の雪屋ぬむとなき柳哉　尾州　左把

柔らかに風よ臭を賣る桃哉　長良　泊枫

春雨の裾よりぬるやきる　巻僧　楚石

今　其流

青柳の氣ゝ入るや春の雨　金沢　沂青
城あとの堀をうばふて柳哉　冬　止敬
むくむくの田よとりさかな　長崎　一帆
一節ふしをくれもの多き柳かな　柏尾　嗽石
ふり初の時雨ほりよき柳哉　石動　可有
雨風よあら面たゝぬ柳のふ　押角　三思
まを松や夜をあけるかげの泡　長崎　禾堤
椿ちる音をおくる柳哉　金沢　八子

方丈のほこりかゝりて柳哉　五泉　春霄
春風の唯なぶりゆく柳哉　本吉　若椎
投込まく深き柳をいとしたふ　今　桃風
行くしを瀬よりいそぐ柳哉　石動　左菊
菜の花よ春の尾をひく日ル山　金沢　生可
菜の花や山さとの夜ふかき　三ノ　野航
鬼あざみ情をむと咲なり　京　吾由
そよそよと仏花也鬼あざみ　女　松月

名もなき山もうちより深緑像
茅かくれを鳥の又せる橋うな
勝もとめまもちふさやちり橋
映帰ふおもひ出てやちる橋
針うまる世ねさうえ寺るつたさ仏
多の屋くちとよい咲て松多
うつむうぬ橋小多をかくこる
あそこうれ新や橋のひとつ咲

ヨリ
岐阜 巴崖
江州坊
有隣
羽州 只白
巻 瑞翅
横越 千尺
奥津 倚菱
平加 蓑風

山法師小橋咲くり数の奥
黒木うと笠よ残すや赤たき
香をはをよ木ひ姉妹の花
ひよとりの苔よ蘇桐をお所多
山寺や花よ百部の転乃多
むちりてう尺ね鶯の口名
近年我戻して姉さく火建哉
夕れの橋うる墨るほうる

金沢
トヤマ 左連
夏橋
村主 一栄
福居 嘯白
加茂り手 山流
右京
横越 一宇
佐原

庵蚤ハ尺ヤ蚊帳のちりうな
等解て風ふちり多し山棚
雨のひや遠寺の鐘ホ初ちう
京物の北側よ山乃さくうな
錦着て長ゆくえ人や山さくら
湖を世てよふ如うな田打うな
詠ても哥や鶏ふちりこ恋の雨
大根の幸味やぬけてねほう月

奥津 巴周
ミノ 東羽
渋上 和勢
岩舩 愚席
曽根 和風
ヨクリ 以之
長良 有琴
笠松 達支

岩藤や波とハいまき及ぶす
苗代の水口寒し一ふの泡
帰雁を一しきほめう水うな
鵠鈴の音高よおりく汐干ホ
きて臼よ女ちうや蓬もち
大文字よ頃の海乃汐干な
きのいりぬ少よ科ホ雛賣
口紅粉のそ名うのし赤のも

富山 一廣
巻 南水
小松 朴人
尾州 麥士
安房 彦平
糸魚川 宇高
々 蒐陽
々 虎勢

掛ケ月を思ふ事共おほろなる

生業のちる入相や雛の庭　出雲崎　楚由

三日乃名ハむつかしも雛の月　泊　松宇

うつひなの里よ墨ぬる赤の幕　羽州　李々

梅ノ梢の寺みても赤乃そま　横越　一笙

桃乃日やはなちも汐干女房ぶり　女　清

祭名残て春秋尽る山路哉　来名　此芳

行春やたゞその菓も薙刀ぬき　岩船　艶月

ゆく春よ酔のさめる椀ゝなる　福居　虚自

塀越ふ庭の深さや雛の夜　大和　笑酔

行春も風中よ豪てや川むこひ　少次ゞ　吟志

やとわれて遊みもする雛の日庸哉　ミノ　雪紅

日ぐもりやおもひわすれたる藤の花　尾州　羽角

行春ぬ時をひやぬちの巻　羽州　一飛

一字

夏

きて臼よ野ゝたけ一晒ス　蓮二房
青柿を鍛屋もたゝく矢頼かな　去来
麦秋や大きな家の二階住　浪化
一点乃雲ゝはたゝ一や白牡丹　木因
水無月もさゝ入れ髪の柳ス　七人 七里
乃ぬきや四畳半よ夏ふとん　一宍
茸乃三のさくらもまー更衣　金沢 亀町

春夏の乃きを垢乃着をたゝむや更衣　土泉 洞池
春夏の乃きをそゝ落ー更衣　石瀬 梅月
鐘乃羽ー風のあゆや更衣　石動 方暨
夏の日よくりたきり寝安原　亀田 之風
廓詞ス照りたきり寝安原　七尾 荷丁
哥江よ夕日ひたゝむちゝん鳴　金沢 志
鐘も蚊毛ひとつ蓮の牡丹ス　富山 秋苍
腰もとよ古てのけるおそ小　七尾 長羽

金沢　山只

寺建や美女菜火

山も里も神の生まるる美代かな

奥津　秋圃

松杉の闇乃蔦や青ぬ山

栃尾　芳舩

和の家や杭おこり晒芳

卯の花よ家々月の数庭水

松宇

来名　宇均

うの花や門を出るのを待飯

狗　素林

野水

隣より戸のきしりなど次

筆とりて一枚ぬらすなつ書

本松や出代りもやなどきよ

雨雲や二番草の時鳥

山水やすまりをつけて郭公

のこゑそ活利庵ちる親

美竹の風よぬる雨長汗

美竹乃家や吹あけ風をよ

金沢　知角

〃　青梨

囲一

七尾　尤季

小玄　左静

梨東

琴　麦活

筆者僧　里薄

かくひとや水月の宵の時雨より

茶の湯者のまゐりて峰や牡丹

やとりて囲よ寒き夜もすがら

燈とりて節供よむまや炎る

ちとりてちやや粽乃もかつを

とそある寺丸囲うへやそこひ苗

走吹と二階そるあのひうな

筵粽よ鳴乃淀菓のそよきうな

驚洲

此柱

鉄与

岐葛

松琵

呂竹

袁橋

牛潮

家そのたそもしやけし畑

そ一乃ちもちや小町をはり

ちのて先内そ一句散そ花のも

ちる田を一句地ありや花そのも

一乃谷よ敲を伝る寝室そそ

寝そそのそぬ佛よ新茶そな

早乙女の隈やくそ水の色

姫そそ笠のかくむく田植そな

尾州
仁夜

大正寺
百五

岩舩
蔦禾

笠森
江楠

山照
六之

クハナ
俗山

大正寺
竜枝

竹のよのひろうあつしや庵の中　蘇寺
休のこゑいのもうとや垣の外　久井 起雪
爰のそよ家かくしや蛸牟　白井 志芦
盗撮よ窓をとてゆや蚊喰る　天野 岐童
みーうあやぶ世の義の窓ころ　金沢 北亮
立と留る人よ堂先表帝ま　七尾 司馬
修善扇よ指のよ立ほちちる　大乗寺 友現
笑ふ兵庫よ楽屋のちる　金沢 手哉

そくさいな人尽るや初ちひ　笠森 雲枝
三年よりのよい利口なり　清洲 桃川
鴫やきぬ羽毎つまでやもつなひ　尾州 梅笠
喰かけて朝日をまつや百合の花　芝去 文堂
青梅や相変もまるかくし一合　芝去 緑風
飯屋の波うつや河岸のうら海鼠　ツルガ 梅蝶
多ふ出る山の裾より飯屋の暖　奥庫 東怨
青もみぢ爰ハ処てわ紙帳を　奥庫 春布

[illegible]風も肺やぬるさもなまぜんの外よ一世話をの懐を
臨乃草庵生造作よ蚊やりを
が白乃麦ばさとるやふちく汁
夏蒸や背戸の掃除の御雨
夏きくや陶淵明の乃好みより
凌霄や玄の指南よりの作り
夕立や色あげをする青田哉

一字　一
亀田　仙鳥
君羽　風竹
よね　倚兼
九升松　麻三
々　赤生
村名　如流
　不石

一雨でよこかりする青田哉
暗号も白く急ぐや秋の行
麦秋や幻牧乃舞
姫ゆり畠ちや空の隙あり石牧の花
おはぎやんのうこくる牧の巻
栗の花ちり降まし嵐乃尾
餅の名も和室よかりし朝
よい風をかき光て入せきり凉

金屋宿　飛嵐
和納　竜吟
イセ　曾北
　有琴
　三逕
　蚊葉
クハナ　里川
泊　杵丁

蔭の花の浄土を廣一風のあも
者々よ極楽もあり蓮乃葬
障まよを泥もうつゝも蓮の花　笠雲　未孔
とりたきてもふもや蝉の色　少方　鷹仙
死よあ〻仕舞の夏し蝉の聲　七尾　昨嚢
百姓の貧いやわれてせこの子を　東洋　山有　寧阿
うまそう障まもあつ一蝉の玉　金沢　橘甫
世の中い也庵まもまあつさうな　壷平

出汗の報をのしする暑さ哉　東洋　篤之
団扇さへきてはあつさの小振なる　〃　倚庵
掃除日の幕よ陰ぬあつさうな　〃　巴周
宵戸よのて寝室よる暑永　〃　雨村
浮雲のまゝ行はそれるあつさうな　浜上　富鶴
まよもすよ座敷もあき暑哉　北方　琴左
寒良寒毛のよくよ長暑小　岐阜　台大
世之音も通る板屋のあ仏　村雲　洞水

鞘豆丸延とひねるおつさう船　京　書方

麦藁や隣乃青のあつさうな　泉　栗松

捉みて茶目よ二つ豆昼寝哉　聲吹

土もこゑ梅長者よ猟人の旅宿もさだまりて実身の
いはさゝれて長良川の鵜舟を見るはたゝ
身すぎ仏孝あるき宵遍路あり〳〵両向ふく
やそかまきとの祖翁乃吟ひ出なれ
ハと眼のあつまりこゝ二十余年の旧懐を催
〳〵受よ此句をもつて〳〵

俳士のきく火よりあれや梅の梅　一字

庵さのゆふとる蓮のうきぬかな　乙由

月の出も夏とや雲の一字帯　さく　勝井　臥

昼顔や扇ホのつて野雪屋　義勇

むるほや昼寝の歌ゟ鬼清多　ゐりり　飛仲

ひるの戸の店を仕舞や巻の鐘　岩舩　雲朝

昼夜の面白よさも砂の照り　馬泉

水無月やまもちもぬ地よさ函　高田　互超

あもむけ団扇のつれ〻風車　里句

久うちや爰ま日あ球待て爰ま　金沢　尓来
九十九髪迄ふ損あり一夜勉　虚舟
藪も種ふ化ける滝ち一夜勉　已千
夕雲ち人も化しきりなき裏　山市
むし一ツやおさまりて笑りく　九朝
色ちやむしの虚をおろそ　尾州　丁教
紅粉ちいろ口ふもつまれて清水ふ　松住女　千代
青空を柄杓てなめる清水ふ　二皇

雲のうちより神代の山もり　曾及
捲簾や庵丁よつく雲の峯　慈竹
手のとくあたもろや雲の峯　金戻女　紫仙
川狩や雨のあらを出てこまひ　福居　苞丈
清ちれて船もまのる涼うな　林紅
あくびして出す馳の音　三ノ関　李仁
青園のちの白し涼舟　天竺堂　春鶴
わう竹の刖あり七ツのすゝむ　福居　之甫

迹て出る灯火宅や寺の夕涼　竹風
川音や耳うつさきへりメすゝ　笙香 海壹
迟刷の差しあり更衣　昇角
葦そのやいよ〳〵簾をまわして文衣　百阿
あのひそ〳〵今不ん雲の　イセ 芭秋
おの〳〵や我もう涼一夕波　一宇
隣てまつやゝ秋の風　金沢 野角

秋

物干て庭もやゝ秋のきりとす　太草
菌菓子むしむしや売の一やまひ　尚白
盃や竟まつ射一杯のたと　洒堂
七阳て秋去をつゝみて蔦の中　百阿
々さそ稲行のよれなすおもし　梅蝶
庇かりて夕の秋をかさり合　鷺洲
三日月を帆よけてもる一ひさる　一字

秋きてや今さてあつさ忘てゐる　　普及
ゆく水と魂の乃る　ひとひよう　　加茂 晩里
はゝ山のんうこうす一羊うな　　丈風
一つ蝉のをりて居る一葉哉　　丈 清
きそいそて飯さく症身よ秋の色　　嵐石
秋もてやのそきかほや下北窓　　山只
花と居てをみちよさとや庫の角　　大和 遊之
そつ秋のまゝこうえ立つ杢の音　　ハ離ト

三ノ
家よりむ葉をちり暑て拂ふ　　右範
秋のてや住をすゐる柳ふ　　始流 加庄
一あらき雲のまひや秋の風　　正住
也り並れ掘の一なよや秋の風　　一宇
羽二重の身よ吸たゝや秋の風　　芦雛 奥津
かり月ふ深出次雲や秋の風　　素竹
三日月や穂屋のすきよかり住居　　和風
うつねの再よ居り窓の秋　　東宇

萩咲や机のちりもねこぬうち　金沢　雷洗
芋の葉の鍬をひくや秋の風　紫電
半分ハ茶ニよ秋きつぬくた哉　午潮
前髪乃あとをなでてや秋風　蒐陽
蜘乃巣のひとり尺まや秋の空　麦士
まろ見にをのう星やう雲や秋の空　村雲女
七夕や傾城よさぶきあり　寺つ
星合やさめてきく笹の雨　有涛
星合やあけハ初ひとりの水鏡　可有
七ツ子乃相伴もあり七夕　奥信　意蝶
星毛ムさしを世のひと常　府中　皈的
かちと蛍乃浅瀬や星迎び　京　范宇
かきけ空よ橋あり星むび　葦吹
ろをはす雲もぬて五ツ星　依風
あさなや市のおこりの立ぬ内　冨山　一雨
朋のほの明りゆくあてま垣ねられ　白雉
　　本北

蓴や志ゐまぬ先もたのこれ
あさがほやさらぬ体の百久しき花稼の百
朝がほやとり付きそめよ花一つ
打ほよのくねき桔梗のはぼそき
月年〳〵名のりかけてや唐がし
いなつ戸や隅しさうな笹の代
稲つまや我もの顔よ雪の雨
稲妻を追ひむ老や俤鴉

大正寺 竹豊
奥津 蘭里
今 蟻城
小松女 女雨
笠委 其由
金沢 篠従
方寿
季布

いまつまれ落くまとあり蓑の蚤
稲妻のかゝいたゝむ早稲田哉

一笑三千のやど

何そのそむまのおたとりの音以夜
花市や女かちなる盃文庫
月のまつま来てゐる穂や高灯篭
水鼎のよくりてや竈まつ更
尓くまれ嫁も今宵の寒さ哉

府中 栩鼓
かな女 水

秋之坊
竝竹
福居 岩之
東守
一雪

七月十六日 熱の一字法師を
ととくたゝく

いうまでもなく生身 鼈山 濤
相撲とりも身もおはつる熱の果 昇角
借銭を迦さるゝ角力とり 桃妖
腰のさゝ顎も毎日や夏さ哉 麦童
さすらひの腰よひぼや老相撲 一丁
久方の美よのこゝろ暑さ哉 一笙
通すべき道そなくて日照雨 鴎笑

とのゝ沢乃鴨の羽がきや星月夜 岐阜 雲枝
鮓の香や翁も蓼の花くもり 今 梅因
入まいて伊達の旅寝や生絣衣 亀田 水胡
川色のおちしおらし秋の顔 柘尾 九里
一時を鶉をさゝる栗穂哉 村松 知路
俗性の尾ハぬけて老鶏の ナ尾 白雪
おむしやれ簾のくらき塵の中 芝朴
待人よちる礼垣根のきりしま 廿 抱

捨られてより牧こまくやきもち
ふひとりの秋う庵のむしの壱　越中堺　真柏
す虫よ手をとりかはせ夜もすがら　岩室　仙人松
乳をねうるまでとつれぬやきりくを　台太
老の目もひつくしたまおりきりくを　雲朝
耳うとき虫の声覚や秋の庭　呼風
稲かりのいまこほろぎいまこのま　一簗
淀柳も待てはすの露の月より哉　金沢　五柵
　　風曲

瞳もつまつ熟柿ホ
名月や水気のやう三井の鐘　五泉　丸子
名月や谷よおろし病れ旅鳥　長崎　佐角
庭うらの耳よ底あるきぬうホ　嵐化
松風もきゝけるきぬうな　此柱
碓きく家よハぬとし密あり　金沢　希因
もゝひ乳よ相手のかりる花うれ　村雲　幸吟
俳さの庵をたゝくやホ夜碓　月扇
　　雲里

松竹の老吹わけ野分かな　村玄　遊鶴

作ハ其の部と兼山子一人前

綿弓や野を縞あけの初冬　泊　鴻羽

出かりや石もひえ切三寸角　岩佩　琴柵

見もかう咲えれ鳥も一日を　府中　岱校

一筆の細さや白の花すすき　京　栢巳

京摺の紬や薄も着みる　嵐七

はこ殊と嫁も化粧の野菜かな　岐阜　槐二

草苅も終るやとろろ花野哉　芝玄　楚柵

菓咲て二日の園を野分哉　一字

誂白の山水あまし菓子花　几董

との袋をときて菓子菊見哉

九日此河をあるき菊見哉　晋市　半朗

殊る蚊の一刻さびし後の月　中津川　玉之

山もまた秋声待りはの月　本言　合之

起てそゞ理屯尽や夜乃月　泊　吉的

鳶兮

行秋や柱を削山八座 紗一　　蔓圃

押入の客あるよ秋の霜　　山市

暁闇をたくく峯もあり夢の秋　　田竜

灯籠のあとや押入て夢の私　　池楓

黄山エ多子ノ郷ヨ老公両人ノ時

信玄の団扇よちひく花野哉　　一宇

永き夜や引よすむ　　蓮二

一日の日も暮やすく月の出て　　若範

冬

誰ぞいふ小あき風の霜けき　　正秀

煤掃やまこゝろの釜底も無し　　万子

生涯よ寒ざくらきう　寒さ哉　　李由

三日月も双ふたりみさむさ哉　　一宇

月の出ぞ穴あけて志ろし哉　　此柱

雪ののる夫木和歌の夏書哉　　鷺洲

十月や　朝もはくも降ぬ　　昇角

水鳥やくゞりぬけたる和尚かな　始流
山茶花とちりや初雪も一時雨　危子
多武峯比丘尼音もえせりけり　路圭
烏賊焼の客をはなるゝや初雪　長門　布方
一つの尾を妙と切るまでは　羽州　十知
行燈やさゝら波の磯別荘　遊樂
ちぎれたる雲のきれ〳〵や一むらし　會良　朗弐
初雪つゝく蓑やかゝるのゝ字形　九里

日の射の雲を睨つゝ去ぬ冬　其巖
側葺や雲もあるじや神無月　岡一
祈むすぶ木立の奥や神無月　山市
泥棒やなまなましく霜をきて　亀吟　金沢
知恩ある山や連広のおもむき　八子
有明う禁裏を本の茅ぶき　三思
幕と八寸ひく遠ひの炭俵　大正寺　草錦
小やーろの留主を切こむ炭俵　枯尾　山雪

落葉ふみて分入家路の日
雪のおくふみ迷ふ春のふもと
傘は紋の如りきる薄墨ふすま
頃るの入相ちるさくら
雨乃宮 風乃宮とてちる葉の葉
うち拾ひ硯ある中や帰京
家ごとのあるじも出もや立り花
奥のほ残りても枇杷のむら咲

亀津 夏子
七尾 依和
本吉 李邑
若松 苍紅
亜江津 巨中
同秋
梅月
豊長

鐘の音ほのぼの本立
嫁つまで老もたてる十夜なる
暁籠や片帆ようけて雪ひら降
雲雨も小褄をとるやそこより
串柿や世をすねてふそこより
長刀や打ちおき酒のそれ竜
牀のある机やかくてぬくもり
一土一く春再ふ水や小魚ちとり

鳴矣
童平
方堅
頓月
言鷺
山隣
一宇
泉江
白苍

花まてゝ鳥もすくひや冬木立　池柵
かゝり川や市稼おそき舟を　里薗
きぬ〴〵の着尽る霜のけむさ小　師冬
明の白き裾よとうね立さま多　千代女
鳶おくれ笠もまきえ寒き朝　亀田　一考
かよ子の寝まあも声きけむさ小　ヨ泉　猿尾
敲立るのつゝぬ馳走の化せさ小　大正寺　田芝
母の寐間顔よ夜半のをみな　似柑

身1添ぬ洗濯夜着の化せさ小　村雲　陳矢
旅がらすのおとふまし鉦のさむ化かな　仝　舎啄
白粉の匂ふ障子や冬の霜　里桃
蔦のもみぢやてかへてやて朝の雷　横越　春胥
頓城の頬青さ光り今朝の霜　可計
冬の月叩り殘る蜘田の橋　巴静
鴛のふとん干日や光り　主催　二川
冬化更て世寒を化物鏡汁　文單

行かりや三井の寺より鴨の声　加茂　啄吹
あら磯よ妻恋ふ牡鹿の生嵐ふく　雲枝
一そそれ雪も小森の日よりかな　右今
如意もぬり掛る夜の雪　ホリ山　紫石
見栄の山よ青あり弥むひ　七尾　和前
老の身や浪花ハなさる雪宝花
一様の水仙ひむ　二間床　松宇
初雪や小山をそとつゝみのに　千尺
　　山カタ　栗几

てつ雪の話をぬすまん片男波　三仙
初雪やてつ石梅の莟もつ　横越文年　吟志
初雪をそゝ一時の花見うな　冬鶯
水除よ鳥の為の雪ハ朝　カ茂久年　貞治郎
絵よ汁を隈てそ久れ雪の鷺　瑞翅
肩てもち肖てそ久れ雪の榊哉　馬泉
古ゝ鷺の立夫やそ千ぬきの雪　トヤ　胡白
八景のかすみや雪乃ひとつ松　一宇

一晴をまつ和拍木も雪の阻　　横越　佐原

こちら〳〵を入よと志りまねく竹の雪　　白雀

雪吸ましく戸口うな　　槐二

燈のまよ入峯乃雪見うめ　　七尾　也翠

我竹乃雪をかろうる羽うち　　長良　仲志

はれまとも降してもりや笠の雪　　河去　白舊

雪のひや書をあれもう食小屋　　嵐七

うす〳〵雪よ化粧せ紗も黒木賣　　楚石

あるをまつ和拍木も雪の阻　　嘯自

小春よハ帰る世話も一丁の壱　　武志

奥ハ剛よ鳥も小春の日和かな　　可及

炭竈のあ〳〵も青よ佐いき哉　　竹風

鼻を雑(カヤ)よ雪ふて寒き横田川　　山只

明日の雨よ草葺の垢りうる　　一宇

よぐうる葦葺雪の垣根代　　トヤ　汐鳥

但馬　李仲

かりぬまで尺迄ふるゝ雪

よとりきく外の座もやすきく

鍾つきや巴山吹もちるころし

筆季みを仕立笠の女房多

葬狩の止まいりを森の塔　巴静

錄をす硯の新墓気也　里紅

冬　井蛙　百阿　濟蛙　九狸

露柱菴之記

おもしろかりて美しき彩雲の立ゆきあひて

多寶山の物をとりて一序なむすむる

貪利貯積のおもひをやめより愛惡

相反の煩ひをおくん情よりて公私

もともあをを身やすくしてもむくお

まおをふかく了解を明るき處を後と

夕ぐれを露をむすびて膝をつゝみ

安しとつむる一の人乃志仏とそ
なし一衣を則をかくさ和ばく
食を一鉢を幸つはつて市門民家
のあるよ志ろ人は衣食住の三つの
人の和名とをつゞきもせられて
世の中乃節仏正月も祭しも乃
ことも妙きも朔日毎の礼老もる礼と
語黙近退志いまよしてゝ巧言

令色の憂名ものまくらへもなれて留主を盗人の
乱つひをしなくひきなれて嶺の雲川も宵ゟ
雲衾竹席のおもひをもひ出ともよ
はれとひとつのはしの俵ありて芋と栗と
をかくしもつふ例の川人よりて
公され家ゝ生涯のもの業を

死らしむれとかのいもかーらよ百貫
の銭を費しー已ら寺ゑも賣ちて
一生を終る法師もあれとも的な
矣ゑれの救ひなとかりの住ぬを欲すと
ゑ痛言されなとかりの住ぬを欲すと
露住の二字をそて代庵よ乳せよ
鑑亨主人ら名みの寺よりよ笠三元帥
の詠句をゆて人篇を末篇とかゐ

より大名の笠荘よ名をあらひく
露柱庵とハ称へくちるへー

主人僧
一宇稿

餞別　其立

錫杖の音や八重霞　可及
花鳥の法をも説くや雲の中　圀一
巻出でゝみんやかろき阿波袋　有隣
たゞそゝもついて送るや涙まで　始添
蒸の当百花見せけり袁公の袖　山市
水嚢よ掬ひ梵国の如の巻　竹鳳

留別

袁をとる一百韵一唱の執進り時

をとひきよ芭竹語洲のあまより
杖笠よ百里の雲を見送らん
ちれて連衣のうすもゝ餞の
提重よ豆腐よ花のゆ義をいと
りそ出陽の坂送々身みも
おわけるき首座迄きこゝ

花ありて園みな名残哉　坂送

一宇

百阿入道

集まりて時ならぬ花を探ぬ
越の新潟の山張といふ所の寂しき法師
ありけるが家のまかりありよき遊女
を婚ひ江水遊覧の僧門を
毎朝出入虎狼名をさけ
ものく騒人の一唱詩を乞ふく

百句一吟の勤をみつゝもそれを卅
集共幕とも咲をしもそれは大和
学とも山ともいつ里もいひつゝ
妹背中をおもふまゝ
婦まのおうひもあるまじ
人和をけ
乃法師を和をて終の

名とハおもしろくもあやうきゝ
ゆ師ゝ筆ゝ
我ゝゝ筆ゝ
かゝうゝハと文質のさうひを挽物
一両書ゝ
享保丁未冬下旬日

京ゝ町通押小路上ル
橘屋治兵衛板